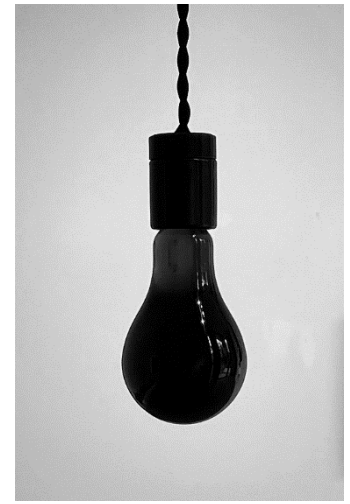


大西伸明展「影見」

2024年6月1日(土) - 6月23日(日)

11時-17時 水木休み

ギャラリーあしやシューレ



大西伸明(b.1972)は、実物と複製、虚と実、表と裏、その「中間領域」に目を向けることで、境界の不確かさを浮かび上がらせ、版を応用した独自の技法によって表現の多様性を深めてきました。複製とリアルを前提に、その二項のあいだにある不確かさを可視化する Infinity Grey シリーズの制作は 2003 年に始まり、同じものを並置することで実在と非在を問う Lovers Lovers シリーズ(2008)、型取りされた裏面を鏡面に、表裏に挟まれた極薄の膜へと迫る作品 Vacuum シリーズ(2015)へと展開。その後ゼロの時点から生み出される「ヒビ」に焦点を当てた影取 Extraction(2019)を発表してきました。

個体ごとに異なるはずの骨、自然に成長した樹枝などを型取りし、それぞれの表面を実物と見紛うばかりにリアルに描き加えることによって複製する Infinity Grey シリーズ。それは単独と複数を並置するウォーホールの直系でもある。……型取りによって生じた、本来の実在物には存在しない「裏面」を見せ、しかも丹念に磨き上げて鏡面仕上げにした Vacuum シリーズは、かけがいのない実在が宿る場所としての二つの表面の間—インターフェイス—を純粹に追い詰める行為。その位置こそは表面と鏡面、すなわち視覚される実在と非在に挟まれた、観念的にのみ存在する極薄（アンフラマンズ）な面である。（清水穰）

清水穰によるウォーホールやデュシャンとの比較を踏まえ、加治屋健司は、複製の観点からチャック・クロースとの比較、ジャスパー・ジョーンズの手仕事性と大西作品の近似性に言及し、「単独性」対「複数次性」そして「イメージ」対「物質性」の二項の間にある、微妙な差異やズレに目を向けるのではなく、その間に横たわる大きな隔たりを指摘しました。

すべて下界の認識は投影であるというユングの「影の投影理論」は、大乘の一元的な世界観の思想ともつながり、影は自身の側面、否定してきたもの、受け容れられない現実や価値観、そういった面を自分ではない外部の他者に「投影」する、自分自身の内面なのだといいます。

実在と不在、表と裏、複数次性と単一性、リアルとフェイク、イメージと物質……。大西作品の背後に蓄積する多様な二律背反（アンチノミー）は、「影」と「投影」に拡大される複雑さを孕みつつ、さらなる思索を進めていくに違いありません。

実と虚、在ることと無いこと、存在と非存在を提示しながら、物体背後にある真空に迫る作品群。

本展の「影見」による新たな試みに、どうぞご期待ください。

お問い合わせ先

兵庫県芦屋市親王塚町 3-11 ギャラリーあしやシューレ 高尾奈美江

Mail : galerieashiyaschule@gmail.com Tel: 0797-20-6629 HP : <http://ashiyaschule.com>